

1. 千葉県における高大連携の実態

(1) 高大連携に関する実態調査の結果について

高校生が大学に通って講義を聴講したり、大学の教員が高校に出張して模擬授業を行うなど、高校と大学が連携して教育活動を行う「高大連携」は、昭和60年～62年の4次にわたる臨教審答申以来の教育改革の流れに18歳人口の減少、大学に対する社会的貢献の要求の高まりといった社会状況の変化も相まって、本県でも現在急速に広がりを見せている。

しかしながら、これまで県教委としては「教育課程に係る調査」において、各校が高大連携の取組を行っているかどうか、また、連携先の大学がどこかを把握していたものの、個々の取組や、千葉県全体の高大連携の実態について、詳細に把握していたとは言い難かった。

そこで、今年度は平成19年度に各高校で行われた高大連携実施状況について、その活動内容から目的、実施体制、効果、課題等に至るまで、より詳細な調査を行った。(参考Iを参照。)

調査結果は以下のとおりである。

- 大学と連携して行っている活動に対しては、「大学の教員を招聘して高校で行う講義」との回答が最も多く、これに「大学における講義の聴講」が続いた。「研究室訪問、実験・実習体験」も17校が行っている。

そして、「特にない」と回答した高校が95校、逆に平成19年度時点で高大連携を実施している高等学校は59校であった。

- 高大連携の目的については、生徒の進路選択の支援との回答が最も多く、逆に高校の教育課程の多様化という回答は比較的少なかった。

- 担当教員の体制については、責任者（窓口）を一人置いた上で、複数の教員が担当している例が圧倒的に多い。

- 得られた効果は、生徒の進路選択に寄与した、生徒の意欲や問題意識の高まりといった回答が多く出た。大学との連携により生徒に現れた変化についての自由記述でも、そのような回答が多かった。

逆に高等学校の教育課程の改善や教員の資質向上との回答は少なく、効果についても高大連携に対する関心が「大学進学」との繋がりの中で捉えられる傾向が強いことがうかがえる。

- 高大連携の課題としては、「受講生が期待したほど多くない」、「事前準備や連絡調整等の面で教員の負担が大きい」といった回答が多かった。また、「進学を考えている生徒以外には動機付けが難しい」といった回答もあった。
- 「高大連携からの大学側のメリットとしてどのようなメリットが考えられるか」を高校に聞いたところ、「高校生の実態把握の場」、「大学側のアピールの場」、「学部・学科のミスマッチを減らすことができる」等の回答があった。
- また、「高大連携を実施していない高校に連携を検討する予定があるかどうか」聞いたところ、「ない」との回答が71.6%と多数を占めた。
また、「連携を行っていない理由」については、「生徒からのニーズがない」、「高校内部の体制が整っていない」という回答が多く、「近隣に適当な大学がない」という回答も比較的多かった。
- また、全体の自由記述欄及び、「県教育委員会に望むこと」については、主に
「大学のみならず企業との繋がりも持たせるべきである。」
「予算面の補充の拡大が必要」
「受け入れ可能な講座について県内の大学の一覧表があれば助かる」
「実践事例の紹介の機会を設けるなど職員研修の機会の拡充をお願いしたい」
「全ての学校が高大連携を行うことが望ましいとは思わない。連携を進めるもよし、連携しなくてもよしという在り方でよい。」
といった意見があった。
- 連携先の大学を選んだ理由は「その大学に進学する生徒が多い」という回答が多く、「日頃からその大学と交流が多い」という回答が続いた。
- 大学との連携形態については、協定を締結していない例が最も多く、一対一協定が続いた。
- 学習内容については高校と大学で協議して決めているものが多かった。大学側、高校側いずれかで決めているとの回答も比較的多くあり、はっきりとした傾向は見られなかった。
- 受講した大学の講義を高校の単位として認定しているところは30校あり、認定していない高校は72校であった。
単位認定の方法については、大学からの報告に基づく場合が最も多かったが、高等学校側でレポートを課している場合も多くあった。
単位を認定している場合、卒業単位に含めるのは19校で、含めていないところは11校だった。

- 講義を受講する際の受講料負担は、66校が「ない」と回答しており、講師の謝金、交通費の負担も「ない」と回答したところが70校と多かった。
- 大学との連携と入学者選抜を関連させた制度については、9割以上の高校が「特にない」と回答した。

以上の結果から、全体的に次の3つの傾向が読み取れる。

1. 高校側の意識としては、高校での教育内容よりも「進路」の部分に高大連携の目的を見出している傾向が見られる。
2. 高大連携を実施している学校は効果を感じ、様々な取組を行おうとしているのに対し、実施していない学校は検討の予定もないという、「二極化」の傾向が読み取れる。
3. 現在高大連携が主に大学側の負担で行われている。

(2) 大学による模擬授業受講者の意識について

① 千葉県教育委員会と千葉大学教育学部との連携事業アンケート結果

県教委では、平成17年度に千葉大学教育学部と協定を締結して、高大連携事業を行っている。この連携は教員養成の性格が強い高大連携であり、大学での授業内容を紹介し、高校時代にやっておくべきことを明確にすることによって、しっかりとした進路意識、目的意識を持った学生が入学してくることを期待したものである。

重点連携校3校は、平成13年度からの3年間における千葉大学教育学部への入学者が多い上位3校（千葉女子高、千葉東高、木更津高）が選ばれ、例年主に4月～7月の土曜日に千葉大学教育学部の教員がそれぞれの学校において出張講義（「基礎教養講座」）を行い、修了者には単位認定を行っている。

また、千葉大学から遠方にあるなど、立地条件を勘案して、夏季休業中に公開講座を実施している。（平成20年度は安房高、成東高、長生高、東葛飾高の4校を会場として実施。）

平成20年度において、これらの受講者に事後アンケートを行っている（参考Ⅱを参照）。結果を概括すると次のとおりである。

- 受講者に対するアンケート中の「将来教員を志望しているか」との問いに対しては、重点連携校・公開講座実施校とも、「教員になることを目指している」との回答が最も多かった。

また、「公開講座を受講した動機は何か」との問いに対しては、重点連携校・公開講座実施校とも、「千葉大学教育学部を志望しているため、同学部について知りたかった」との回答が最も多い結果となった。

このことから、受講者はかなり明確な目的を持って受講していることが分かる。

- 「受講してどのような成果があったか」との問いに対しての回答は、重点連携校・公開講座実施校とも、「今までの学校の勉強では得られなかった広い教養が身に付けられた」が最も多い結果となった。（ただ、複数回答可としたこともあり、受講者は多くの選択肢を選んでいる。）また、「ものの見方が変わった」との声もあった。逆に「成果は特にない」と回答した受講者はほとんど見られなかった。

- 「期待とは違い、不満を感じた点があったか」との問いに対しては、重点連携校の受講者においては、「講義内容が難解で理解できない部分があった」、「大学教員ともっと親しく交流したかった」との回答が比較的多くあった。

これに対して、公開講座の受講者においては、「時間が短かった」との回答が多くあった。（公開講座の講義時間は60分。）

両者に共通して「その他」を選択して「指導法などの教育学部ならではの講座を受けたかった」、「自分が一番希望している教科について学ぶことができなかった」といったことを指摘する生徒が多く見られた。このことから、講義と自らの学びたいことが合致しないといったミスマッチを感じていた生徒が少なからずいたということになる。

- 自由記述欄では、「教員になりたいという気持ちが強くなった」、「広い教養を取り入れられるこの講座はとても有意義」といった声が聞かれた。

また、土曜日は部活動と重なり、欠席せざるを得なかったというように、曜日・時間帯の配慮を求める意見もあった。



千葉大学教員による模擬授業の様子
(県立木更津高校)

全体的には、生徒は「教員になりたい」あるいは「千葉大学教育学部に入学したい」といった動機から本講座に参加する傾向が強いものの、実際に受講してみると、はっきりと一つの正解が導き出される、今までの「学校の勉強」に慣れてきた生徒達にとっては、様々な見方がある正解が一つとは限らない大学の勉強の一端に触れること

は、大変な刺激になったものと思われ、さらに自己が進むべき将来の進路へのモチベーションにも繋がるといった相乗効果を生んでいるようである。

また、生徒とは別に、重点連携校、下記公開講座実施校の教員から事後に寄せられた要望の中でも、受講生のニーズを満たすための多様な講座の設置、教育学部以外の学部（理学部、工学部、医学部等）の講師による講義の実施、講座内容や実施時期・曜日について事前に高校側から要望する機会の確保—といったものが多くあり、できる限り生徒のニーズと設置される講座のミスマッチを防ぎたいとの教員の意識が現れている。

② 高大連携実施校の卒業生からのヒアリング結果について

上記の高大連携講座の受講者を対象とした事後アンケートに加え、①高大連携の様々な取組について、生徒の視点からの評価を聴取すること、②これらの取組への参加がその後の生徒の進路に与えた影響を聴取することを目的として、高等学校在学中に、連携講座の受講等、高大連携の取組に参加した者で、現在大学に在学している学生を対象としたヒアリングを実施した。

ヒアリングは、高等学校と大学の教員等の交流会（第2回）において行われ、①高大連携を経験しての感想、②高大連携が自分に与えた影響、③今後の高大連携についてをテーマとして行われた（参考Ⅲを参照。）。

学生から聴取した意見は次のとおり。

○ 参加した7人の学生全員が参加してよかったと答えている。具体的にはほとんどの学生が大学の雰囲気や学ぶ内容を知ることができたことを挙げており、大学への入学前と入学後でイメージが大きく変わったという学生はいなかった。

その他、大学で開設した講座に参加したことで早期の段階で大学の環境に慣れることができたことや、大学の教員と知り合うことができたことを参加したメリットとして指摘する学生もいた。また、高校にない設備を利用することで、ものづくり大会の準備ができたことを挙げる学生もいた。

○ 期待はずれだった点としては、事前の情報があまりなかったため、内容をよく分からないまま授業を受講するかどうかが決めなければならず、実際に受講してもよく理解できなかったこと、自分が受けた分野の講義が設定されていなかったこと、高度な内容を短時間でこなすために説明が不足していたことなどが挙げられた。

全体的には内容が高度で理解できない部分があったことを指摘する意見が目立った。

○ 大学教員による講義の回数については、内容が難解で後半だらけてしまった感があるので、いろいろな講義を2、3回ずつ受けた方がいいという意見と、10回以上出

席して初めて結果が出る講義もあり、大学に慣れるのにも時間がかかるからある程度長い時間をかけた方がいいとの両論があった。

また、講義の時間については、大学に合わせた90分授業はそれを受講したことのある全ての学生が長いと感じていた。興味のある内容だと我慢できるが45分で区切ってもらえると受講しやすかったとの意見があった。

- 大学の講義を受講することで高校の単位が認定されることについては、それほど学生は関心を示しておらず、講義を受けてその内容に触れること自体に価値を見出している傾向が強かった。
- 高校で高大連携講座として受講した講座を再び大学で受講することについてあまり抵抗感は見られず、むしろ繰り返し受講することでより講義内容を理解でき、自分の成長の度合いが分かるとの意見もあった。
- 高大連携講座を受講することでAO入試に有利になると思ったとの意見があり、ヒアリングした7人中3人がそのような意識を持っていた。また、実際に高大連携講座の担当教員が偶然AO入試の面接官となっており、リラックスして面接に臨んで合格できたとの例もあった。
参加した7人中、高大連携の取組が大学を選ぶ決め手になった学生は2人いた。
- 高大連携の取組を通じて、大学に入学して自分が学びたいことをはっきりさせることができたとの声が多く聞かれた。
また、高校段階からプレゼンテーションに慣れていたので、大学でこれを抵抗なく準備することができたことなども挙げられた。
- 今後の高大連携に関しては、多くの意見があった。主なものを挙げると次のようなものがある。
 - ・ 特定の高校のみではなく、様々な高校が参加できる機会があるとよい。
 - ・ 高校生と大学生との交流会のような機会を設けるなど、勉強に加えて大学生活を知るための取組もあった方がよい。
 - ・ 大学では自分から積極的に働きかけないと得るものがない点が高校と決定的に異なることを実感しており、それを高校生にも伝えたい。
 - ・ 1年生の時はどの分野を目指すのか悩んでいる時期なのでどのような学問があるのかを知りたいが、3年生になると具体的に志望校を決める上で大学の実態について知りたい。各学年に合った内容の連携を行うべき。